

## 巻頭言

〈小特集〉「ダークツーリズム」研究の拡張  
——「ポリフォニック・ツーリズム」研究に向けて——

Special Issue : Extensions of “Dark Tourism” Research:  
Toward “Polyphonic Tourism” Research

「ダークツーリズム」とは戦争や災害の記憶・歴史を後世に伝え、人類の“悲しみ”や“苦しみ”を理解しようとする観光であるとされる。「ダークツーリズム」研究は、グローバルに拡大したオフショア化された市場の恩恵に浴している人びとの日常をいったんカッコにいれさせ、その状況を再帰的に考え直させ、「他者に寄り添い共生する」観光について考えさせてくれる。しかし、われわれ研究グループは、ある観光現象を「ダークツーリズム」と呼ぶことに対し、大きなためらいも感じてきた。「ダーク」とは一種の“価値判断”にほかならない。だが何を、誰が、いかなる資格で、何の立場から「それはダークなのだ」と価値判断できると言うのか。

具体例を挙げよう。ブラジルには「ファヴェーラ」というスラムや貧民街がある。そこでの暮らしには、多様で根深いイシューが数多く存在している。だからと言って、その日その日をしたたかに生き抜いている人びとの、そこでの暮らしを「ダーク」と“価値判断”することは可能なのか。可能だとしても、必要なのか。「ダークツーリズム」という概念を用いることで、知らず知らずのうちに研究者までもある一定の評価軸＝価値観から“価値判断”を行ってしまっているのだとすれば、そうした概念は再考されるべきであろう。

それだけではない。「他者に寄り添い共生する」ことを可能にする観光と

いうとき、それは「ダークツーリズム」に限ったことではないだろう。もちろん戦争の時代や地域を生きたとそうではない人、テロによって傷ついた人とそうではない人、地震・津波・台風等の自然災害によって傷ついた人とそうではない人、差別をうけた人とそうではない人、深刻な貧困にあえぐ人とそうではない人——こうした人びとが相互に他者として寄り添い共生することを模索するうえで、「ダークツーリズム」研究がこれまで果たしてきた役割は非常に大きかった。

だが今日の世界の中では、それだけではなく、多様な性を有する人同士、多様な文化・民族的背景を有する人同士などが、他者として寄り添い共生することも志向できるような観光も、つよく求められるようになってきているのではないか。「ダークツーリズム」研究が蓄積してきた成果を含めつつも、モバイルな現代社会に暮らす人びとがダイバーシティ（多様性）を有しつつ、様々な国・文化・民族・性等を背景に、他者と共生していくために、どのようなパフォーマンス（振る舞い）が大切なのかを考えていく観光——われわれは、こうした観光について今後、議論していく必要がある。

そこで、われわれは「ダーク」という“価値判断”を斥けつつ、既存の「ダークツーリズム」研究を批判的に再検討し拡張することを目指すことにした。われわれ研究グループは、「ダークツーリズム」のように一定の評価軸＝価値観から“悲しみ”や“苦しみ”を「モノローグ」的に綴るのではなく、ロシアの文芸批評家ミハイル・バフチンが「ポリフォニー」という概念で表そうとしたように、異質で多様な他者同士が、ときに対立するような複数の記憶や歴史をぶつけ合いながら、不透明で矛盾を孕んだダイアロジックなコミュニケーションの中で浮かびあがるような観光を「ポリフォニック・ツーリズム（多声的観光）」と名づけ、「ダークツーリズム」研究を「ポリフォニック・ツーリズム」研究として転回することを試みることにした。

本特集に寄稿された諸論稿は、このことに挑戦した力作ばかりである。この特集から、「ダークツーリズム」研究の批判的再検討＝拡張を通じて、「ポ

リフォニック・ツーリズム」研究に向けた議論が始まることを願っている。

2019年10月

立命館大学文学部教授・人文科学研究所所長

遠藤 英樹

※なお本特集は、JSPS 科研費 17K02142 「アジアにおける平和の記憶を紡ぐメディアとしてのダークツーリズム」の研究プロジェクトとの連携のもとで企画された。

